サンエスダイカスト

サンエスダイカスト（大阪府八尾市、木下正夫社長、06・6704・9991）は中国・大連の関連会社「大連博創精密工業」を通じて中国でダイカスト事業の拡大を進めている。大連博創はもともと現地資本の企業。約9年で本社を4回移転・拡張するほど、急激な成長を遂げている。それを支えるため、サンエスダイカストが同社に出資している。現在も拡張に必要な資金を貸し付けるなど、連携を強めている。

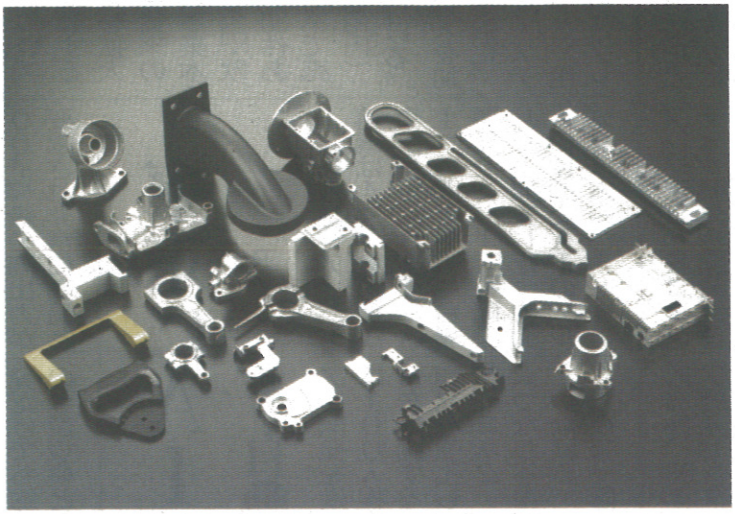
（大阪・石宮由紀子）

グローバル経営
適地生産
適地販売

中国の提携会社 移転・拡張

鋳造部品 大型・高精度に

大連博創精密工業は、2008年設立の現地企業。サンエスダイカストの木下忠紀代表取締役専務が09年に取引先から紹介され、取引を開始した。16年2月には、サンエスダイカストが10%、同社のグループ会社の木下アルミ（大阪府八尾市）が25%を出資した。出資後も、大連博創の設備投資について、サンエスダイカストが貸し付けを実施している。「現地の金融機関は金利が約7%と高いなどで、なかなか活用できない」と木下専務は話す。そのため木下専務が頻繁に現地に赴き、技術指導などを含めた仕事をしている。



サンエスダイカストの製品群

当初は国内のコスト削減を目的として現地から日本へ金型を輸出していたが、現在では中国市場も金型とダイカストの需要が拡大。それに伴い大連博創の成長スピードが加速している。16年10月、近隣の別の賃貸工場から本社工場を移転した。延べ床面積は約2倍の4000平方㍍となった。移転先の工場を改修したほか、建築向けの加工のため、型締め力650㌧の鋳造機1台を新規導入した。大型鋳造機の導入により、従来手がけていなかった縦400㍉×横400㍉㍍の大きさまで鋳造できるようになった。また、2月に同400㌧の鋳造機を追加した。

検査工程を改善 自動車関連 照準

従来手薄だった検査工程の整備にも着手する。4月に約1500万円を投じて検査機器計3台を導入し、鋳造から部品加工、検査までの工程を立ち上げ、自動車照明向け部品の受注につなげる。導入する検査機器は3次元測定機と材料分析器、X線測定機の各1台。自動車部品では、従来受注の中心だった建築部品関連以上に、高い寸法精度と保証が求められているため投資に踏み切った。

同社が立地する大連では、日系自動車メーカーが工場を稼働しており、車部品メーカーへの波及効果が期待できるとみている。

4月の投資では、大連博創精密に1500万円を貸し付ける方針。そこまでして中国の提携企業の設備投資に力を入れるのは、日本国内の工場拡張や新工場の建設に費用がかかりすぎるという現状がある。「国内では投資が高くなる一方で回収の見込みが立たないため、当社の規模では難しいと考えている」（木下専務）という。大連博創は、18年1月期に5億7000万円の売り上げを目指す。

▲大連には日系自動車メーカーが進出しており、波及効果が期待できる（大連博創精密工業）

サンエスダイカストは、日本国内でのコスト削減のため大連博創での生産拡大を進める一方、国内では自動車のミリ波レーダー部品など、より高精度なダイカスト生産に注力する。14年に計1700万円を投じて、CNC（コンピューター数値制御）加工機と3次元測定機を1台ずつ導入した。自動車分野での衝突予防システムの需要の伸長に備え、生産性が高い設備の導入を推進。取引先のニーズに合わせ、中国と日本の両拠点を活用して対応する。